
ある召使についての覚書

久世 烏水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある召使についての覚書

【Nコード】

N7410I

【作者名】

久世 烏水

【あらすじ】

それは、祝福の鐘の音からはじまる。

暖かい部屋の中、柔らかな布地にくるまれた、瓜二つな二人の赤子。喜ぶ王と妃を尻目に、周りにはちょっとした絶望と、暖かいまなざしで新しい生を迎える。

——賢者曰く、双子が災いを呼び起こすことは、珍しきことに非ず。

西の地にその名を轟かす、王国フレイヴァ。

悲しき運命の齒車が今、廻り出す。

第一話 災いの子ら

昔、西の地に大国フレイヴァ在り。長年、その国を治める王と妃は子宝に恵まれなかった。貴族の親戚から養子をとるという話もち上がりはしたが、子ども好きな妃は、年の差が一回りほどしか変わらない、立派な青年を迎え入れるつもりはなく、首を決して縦に振ろうとはしなかった。

そんなこんなで数年が過ぎていき、従者たちの不安の囁きがますます大きくなる頃、運命の日はやって来たのだった。

妃が懐妊した——喜ばしい報せは瞬く間に王宮に広がり、国中を駆け巡った。町中では、民衆たちの話の種は専ら王子か姫のどちらが生まれるかということで、酒場では密かに賭け事の対象になっていた。

「俺はお姫さんだと思うね。いや、そうあつて欲しい!」

「・・・そりやお前の願望だろ、クルド」

フレイヴァの首都にある酒場の中でも1、2を争う広さを誇る【猫の集い】は今日も満席だった。過酷な労働で疲弊した体を休める場として、男たちが酒を酌み交わし、談笑する中、一気に飲み干したグラスを天にささげつつ熱烈に語る男を、くわえ煙草の若者が苦笑して見上げた。

「だってよう、この国のお妃さんは大層な別嬪だって言うじゃねエか。そしたらお姫さんだって・・・」

「はいはい、お前ほんつとに別嬪と酒にしか興味ないのな」

若者はくすんだしかも癖っ毛のある金髪を掻き揚げると、気だるげに対応する。

「おうよ!でなきゃ男が廃れるつてもんだぜ」

クルド、この男のような思考回路を持って生きられたら、誰もが人生に十分喜びを得られていいと思うが、どうやら自分はそうはいかないらしい。半ばため息と共に煙を吐くと、思い出したようにに

やりと笑みを浮かべる。

「別にかまわないが、ほどほどにしておけよ？カミさんに半殺しにされるぞ？」

「……こんなときにあいつの話を出すとは。いつから腹黒くなっただ？キイス」

お世辞にも美人とは言えず、ましてやお淑やかでもない自分の妻を思い出して、苦虫をかみつぶしたような顔になる。浅黒いはずの彼の肌がいつもより白く見えるのは気のせいだろうか。

「……はあ……あーあ、何で俺……ってか、違う！今の話はそんなじゃないだろ！」

「ああ、将来のこの国の主は男か女かって話？」

「そうだつ、お前はどっちなんだ？王子か、姫か？……いや、今さらそうだとしても姫とか言うなよ、賭けになんねえ」

青くなったり赤くなったりと忙しいクルドをよそに、キイスは短くなった煙草を灰皿に押し付けると、三本目に火を付けた。

「……そうだな、俺は王子か姫かなんて、そんな事に興味はないんだ……ただ……」

ふう、と紫煙を吐きだすと、長い睫毛を伏せ、まるで遠い未来さきを見透かすように、若者は呟く。

「この国がずっと豊かで、平和でいてくれさえすれば……俺は、いい」

その翌年、穏やかな光さす春の頃、王宮では王家の紋章である黄色の獅子の旗が掲げられ、王国の中心にそびえ立つ教会の鐘が荘厳に歓喜の時を告げた。

柔らかな布地にくるまれた赤子は一人ではなく、二人だった。それも、まったく同じ顔をした。

待望の跡継ぎということで、王と妃は幸せを噛み締めていたが、従者含め周りを取り巻く者たちは皆、動揺の視線を投げあう。

——賢者曰く、双子が災いをもたらすことは、珍しきことに非ず。

国に伝わる古い古い言葉が、皆の脳裏の一角にじんわりと淡い染みをつくっていた。

第一話 災いの子ら（後書き）

久世烏水の初作品です。

このお話はご存じの方も多くいらっしゃると思いますが、『悪ノ召使』という歌をもとに自分なりに再構築して出来たものです。完成速度は亀並みになるかもしれませんが、ご了承ください。さて、また縁がありましたら、第二話で逢いましょう。

第二話 運命の輪

双子の姉弟のうち、姉のほうはシアン、弟のほうはシオンと名付けられた。

「ほら、出来た。シアン、被ってみなさい」

手入れの生き届いた庭の芝生に、親子は腰を下ろしていた。

6つになったばかりの姉弟は、優しくほほ笑みを浮かべる妃の膝もとへ来ると、無邪気に座り込む。

「なあに、かあさま？」

「はい、シアンお姫様」

「わあ、おはなのかんむりだ！」

頭に載せられたのは、シロツメクサを編んで作られた花輪だった。

「侍女のメイから教わったのよ。綺麗でしょう？」

「・・・いいなーシアン、かあさま、ぼくもほしい」

きやつきやつと喜ぶシアンの横でシオンはふくれっ面をする。

「ん、まってかあさま！シオンのは、シアンがつくるの！」

「まあ、優しい子ねシアンは」

妃に手とり足とり教えられること30分。やっとのことで、歪ながらシアン作の花輪が出来上がった。

シアンは胸を張りつつ、途中で投げ出しそうになりつつも形になった力作を、シオンの頭にのせてやる。

「・・・ありがとう、シアン」

ところどころ、ほつれている気がしなくてもないが、そんなことは気にしない。

少し照れくさそうに、シオンは微笑った。

そんな穏やかな時間は、あまりにも短かった。

宰相と従者の間では密かに双子の処分を考えているものが大勢いた。それも、ひとえにあの古い言い伝えのせいである。双子は災い。その言葉が呪詛のように空気を取り巻いているのに国王は気づいていた。二人一緒にいるのがそんなに目障りなら、いつそのこと引き離してしまおうと王は考えた。彼らが恐れているのは恐らく、これから姉弟が成長していくにつれて浮上してくる王位継承問題だと思っただのだ。

王国フレイヴァの国の主となりえるのは基本的に男性と決められている。しかし、当のシオンはおとなしく引っこみ思案で、時期国王にするには少し心許無かった。こころもとなそれに比べ、姉のシアンは明るく利発でリーダーシップも持ち合わせていた。そこで王は長年の習わしを変えてしまった。すなわち、シアンを時期王女に認定したのである。弟は召使の身分に落とすことに決定した。そしてそれを実現させるには、早期に姉弟を引き離す必要があつた。

ある日、庭で遊んでいた二人を、従者達が別々の部屋に連れ帰った。一人は絢爛豪華な王の間に、もう一人は簡素な召使の部屋に。

今日からここで生活するのだと言われ途方に暮れるシオンを一人残し、従者は去って行く。

じめじめした石の壁、粗末な寝具。目に入る何もかもが新鮮だった。手にしていた花輪を無意識に握りしめながら、シオンは暫らく重く閉ざされた扉を見つめていた。

第二話 運命の輪（後書き）

初めての方にははじめまして、そうでない方は、長らくお待ちして申し訳ございません。お待ちかねの2話目でございます。これから運命は廻り始めます。それでは次話で逢いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7410i/>

ある召使についての覚書

2010年11月5日11時54分発行